巻頭インタビュー

聞き手／ジェンティーレ恵　写真／北村美和子

いのちを守る伝承の未来——

INTERVIEW

東北大学
災害科学国際研究所 所長
いまむら ふみひこ
今村文彦

（平成元年（1989）東北大学大学院工学研究科博士後期課程を修了。同研究科附属災害制御研究センター教授などを経て、平成26年（2014）4月から現職。専門は津波工学。一般財団法人3.11伝承ロード推進機構代表理事も務める。）

震災から12年のあゆみを振り返る

——震災後に研究所が設立されました。これまでの研究・活動内容を振り返っていただけますか？

今村所長（以下、今村）：東日本大震災は地震・津波・原発事故など、広域で複合的な連鎖によって引き起こされた大災害となりました。研究所では、それらを繰り返さないために「なぜあのような災害が発生したのか」という震災のメカニズムや対応策を研究させていただいています。その成果は災害科学分野の深化に繋がったと思います。

一方、メカニズムが分かったとしても、今後の防災に役立てなければなりません。我々のもう二つの柱は「実践的防災」であり、地域で使っていただけるような知識や技術、システムなどを検討しています。被災地域へのご支援や取組みを、大学だけではなく企業や海外の方と協力しながら実施し、設立当初の目的はだいぶ達成できたと考えています。

——研究するなかで見えてきたことや、今後の課題を挙げるとしたらどんなことがありますか？

今村：やはり課題は人的被害の低減です。震災では津波で亡くなられた方が多かった、そこには防災意識や認知心理、避難行動という我々人間自体の問題がまだ残されています。震災前から避難訓練や啓発活動などをしていましたが、それでは足りないのだと。まずは〝自分ごと〟に思っていただくことが必要になります。

もう二つは10年あたりを過ぎると、いわゆる風化ということで、日常生活のなかで12年前の記憶がだんだん薄れてしまっています。それが防災意識の低下にも繋がります。また同時に犠牲になられた方への思いなど、被災者の方々のメンタル的な課題も残っています。

——12年間を生き抜いてきた被災者の心情や向き合い方にはどのような変化が見られるでしょうか？

今村：どのように被災体験を捉えられるかは人それぞれで、地域によって違います。先に進もうという所もありますし、一歩を踏み出すことが難しい所もあり、一様ではありません。震災当時も含めて状況を受け入れるというのはなかなか難しく、見えない心の問題は大きく重要な課題です。震災当時直接その影響を体験してしまった方は、忘れることは絶対にできないので、そのことを「自分のなかでどう捉えていくのか」ということだと思います。そこにさまざまな関係もあり、〝これだ〟という正解はありません。

伝承し続けることの難しさと大切さ

——過去に何度も災害は繰り返されてきました。さきほど「風化」とありましたが、伝承の難しさはどこにあると思われますか？

今村：従来の伝承方法というのは、石碑や語り部、古文書としての記録が中心でしたが、今の社会においてそれらに接する機会はなかなかありません。実際、今回の津波を受けて石碑があることを知った、という方が多いです。日本は確かに災害文化が残っていて有効ではあるのですが、今後それがそのまま役立つかというと、3・11では難しかった。今の時代に合わせた新しい文化を作らないと伝承は続かないのだろうと、伝承のやり方を変化させなければならないと思います。

——新しい伝承方法というのは具体的にどんな例がありますか？

今村：記録としては震災当時の映像や写真、あとはツイッターなどデジタル情報が多く残っています。阪神・淡路大震災の時には限られましたが、時代の流れで情報量が格段に増えました。逃げながら撮った映像など個人レベルでの記録が桁違いの量で残されています。映像を見ると当時に戻ってしまう厳しい一面もあるのですが、やはり伝えるという面では有効です。震災伝承施設や震災遺構などの場で、知りたいという人々の希望に合わせて適切に提供するのが必要だと思います。

——今回各地に整備された震災伝承施設では、どんなプログラムが提供されているのでしょうか？

今村：新しい展示方法としてはVR（バーチャルリアリティ）もあります。また建物などの外へ出て、現場を歩くプログラムなど、語り部や地域の方、学芸員もいらっしゃるので、質問や対話をしながら学びを深められ、新たな発見や気付きを得られます。人を介した理解と交流はとても大切だと思います。

東北4県に整備された震災伝承施設の意義

——3・11の経験が震災伝承施設に生かされた点や、伝承ロードとして整備された意義を教えてください。

今村：今回の震災は広域かつ多様でした。被害状況や復旧・復興の取組み方は各地域でまったく違います。その地域性・多様性を東北4県、震災伝承施設300カ所以上で紹介できていると思います。いろんな施設・エリアでさまざまなことを学んでいただきたいので、「伝承ロード」として沿岸部を繋ぐことが大切でした。

——展示施設や震災遺構などがありますが、先生ご自身に思い入れのある施設はありますか？

今村：震災前から防災教育に一緒に取組んでいたのが「仙台市立荒浜小学校（P78）」です。〝津波はかせ〟という実験水槽をもって行って子どもたちに津波の怖さを教えたり、避難訓練もしました。あとは「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（P56）」。あの辺りでも避難訓練や啓発活動をしていましたし、現在は遺構と展示、ワークショップやセミナー室もあり多様な機能をもっている施設になります。

↑平成20年（2008）に行われた出前授業の様子。子どもたちに実験水槽「津波はかせ」を用いて津波の起きる仕組みを解説し、防災の大切さを伝えている

——震災伝承施設の役割に今後期待されることは何でしょうか？

今村：震災伝承施設は被災地にあるメモリアルなものなので、その場所に来ていただかないと震災当時の影響をイメージできません。企画やイベントもあるので、国内外から防災や地域づくりに関わる方たちに訪れていただいて、いろいろな学びや気付きに繋げていただきたいです。

また月日が経つと記憶は変化してしまいます。アーカイブとして現物や原資料を残す役割も重要です。原資料は体験と共に、今の芸術・文化、特に文学や映画などに影響を与えています。それらは心に訴えかけられるものがあるので「あぁ大変だったね」で終わりではなく、自分ごとにしていただき、思いを行動にしていただきたい。今後は芸術・文化の活動が防災活動に発展していくことを願っています。

——最後に読者にメッセージをお願いします。

今村：この震災を一回の訪問でご理解いただくことは難しいです。さまざまなテーマや課題があり、その伝承のやり方もあります。どこからでもいいのでまず訪れていただいて、また次の場所へリピートしていただきたいです。さらに、東北は自然が豊かで、おいしい食やすばらしい風景もあり、同時に楽しんでいただけます。そして我々はこの地球にいる限り、その自然や環境に生かされています。食や歴史文化、エネルギーとして資源を享受することの意味をもう一度考えていただけるきっかけになればと思います。